

川崎正蔵と川崎美術館—第 13 回展覧からみた活動と顕彰—

石沢 俊（神戸市立博物館）

川崎造船所（現在の川崎重工業株式会社）の創業者・川崎正蔵（1837～1912）は美術愛好家としても知られる。明治維新による古美術品の看過、海外流出を憂えた川崎は、伝銭舜挙筆「宮女図（伝桓野王図）」（国宝、個人蔵）や伝顔輝筆「寒山拾得図」（重要文化財、東京国立博物館蔵）をはじめ、日本・東洋の絵画・仏像・工芸品の優品を幅広く収集した。2,000点とも伝えられるコレクションは昭和2年（1927）の金融恐慌をきっかけに散逸していったが、主要作品は三回忌に刊行された『長春閣鑑賞』（國華社、大正3年〔1914〕）や二度の売立目録（第1回：昭和3年〔1928〕、第2回：同11年〔1936〕開催予定も二・二六事件で無期延期）から確認でき、国内外に約200点が現存する。

コレクターとしての川崎の重要な功績は、明治23年（1890）9月6日、神戸市布引の川崎邸に日本初の私立美術館「川崎美術館」を開館したことである。従来、日本の博物館史では大正6年（1917）に大倉喜八郎（1837～1928）が創設した大倉集古館及び前身の大倉美術館（明治34年〔1901〕落成）が日本初の私立美術館と考えられてきたが、遡ること十数年前に川崎はコレクションを秘蔵することなく川崎美術館を公開し、美術家の参考と国家の益を目指していた。同館では概ね年に一度公開が行われ、明治32年（1899）11月、皇太子行啓の折に「長春閣」が竣工すると、2館で展示が行われるようになり毎回600点前後の作品を陳列した。

本発表では、川崎美術館の展示室の検討、陳列品目録の精査、『長春閣鑑賞』や売立目録との対照、同時代の新聞記事の参照を通して、同館の活動を多角的に明らかにする。具体的には、はじめに2階建ての同館の展示室のうち、同館で用いられた円山応挙の旧南禅寺帰雲院障壁画（東京国立博物館蔵）を通して1階上之間・広間・三之間の復元を試みる。次に、同館が刊行した陳列品目録から展示の詳細を確認する。4回分が現存する陳列品目録は、各室の展示作品名が掲載された、きわめて重要な資料である。今回は大正7年（1918）11月1日から3日に開催された第13回展覧を対象として、陳列品目録の精査を行う。第13回展覧は川崎正蔵の七回忌追善として開催され、現在判明しているかぎりでは同館最後の展覧である。陳列品目録と『長春閣鑑賞』、売立目録との照合により、部分的ではあるが展示の復元が可能となる。とりわけ、広間は円山応挙と弟子たちの作品、三之間は狩野探幽の作品を一堂に展覧しており、応挙と探幽の一大コレクターとして知られた川崎正蔵のコレクションを顕彰する様子が見て取れる。さらに、この展覧に関する新聞・雑誌記事を通して、同館の活動の反響を確認する。

上記の検討を通して、私的なコレクションを美術館で公開した川崎正蔵の功績を改めて評価するとともに、没後なお家族や知人たちに慕われ、顕彰されたコレクションと川崎美術館の様子、今はなき日本初の私立美術館の意義を明らかにしていく。